



JSQC ニュース

No.272

発行 社団法人 日本品質管理学会

東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内

電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507

ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス ANQ Congress 2006報告
- 2-私の提言 『タグチメソッドとSQCの融合を!』
- 2-ルポルタージュ 第313回事業所見学会ルポ
- 3-飯塚悦功氏デミング賞本賞を受賞/デミング賞ほか/9月入会者紹介
- 4-行事案内/研究会メンバー募集/各賞表彰/第36年度役員体制役割分担

ANQ Congress 2006報告 —ますます広がるアジアの輪 来年は韓国—

国際委員会委員長 安藤 之裕

去る9月27、28日の両日(29日:企業訪問)シンガポールにて、ANQ Congress 2006が開催された。1991年に日本、韓国、台湾の参加国で始まったAsia Quality Symposium から数えて20回目、それを発展させてAsian Network for Quality (ANQ) になってから4回目の大会であった。

ANQは、今年、ロシアの新規加入を含めて現在16組織が参加しているが、今回はそのうちの14組織とヨーロッパ・アメリカからの参加者も含めて400名あまりが参加した。JSQCからは、シンガポール以外では最多の41名が参加し、また、発表件数も最多の32件となり、多大な貢献が果たせた。

基調講演では、日本から、ANQ名誉会長であり、本学会元会長でもある、狩野紀昭東京理科大学名誉教授による、アジアの近代の歴史を踏まえた「品質汗かき論」と、本学会第35年度会長の桜井正光リコー社長による、同社の顧客満足・環境戦略に関する具体的な取り組みが紹介され、

ともに非常に高い評価を得た(基調講演概要はANQ-WEBサイト=<http://anforq.org>に掲載される予定である)。

今大会で特筆されることに、発表件数が非常に多くなったことがあげられる。今回はパネルセッションも含めると144件にものぼった。それだけ、発表の場としての認知が高まったといえよう。

また、特別セッションとして、JSQCによる「サテライトセッション」も実施した。これは、シンガポールの会場と日本、インドとをインターネットで結び、両国での発表にもとづいてシンガポールと議論するというものである。

日本からは、玉川大学の大藤正教授にQFDの基本についてご講演いただいた。このサテライトセッションは、一昨年のインド大会の時は、筑波大学司馬正次教授にご出馬いただいたものの、開始1分前に回線が遮断したり、その後も安定しなかったりというハプニングを体験したが、今回は、武蔵工業大学の兼子毅講師による技術的向上により、実に明瞭な

コミュニケーションが安価に実現できた。これは、アジアに散在しているANQ組織間のコミュニケーションをより豊かにするものとして、今後の活用が期待される。

本大会に参加して常を感じることは、アジアの熱気とダイナミズムそして人なつこさである。戦後の復興期から高度成長そして品質で世界のリーダーシップを取ったといわれる90年代半ばまで、日本を支えていたあの熱気と品質に関する情熱である。それが、発表や討論のみならず、会場全体に彷彿としており、人なつこい参加者と触れ合うことにより、非常に心地よいのである。

大会を締めくくる、Farewell Dinnerの中では、若手発表者の中から優秀論文が選ばれて表彰された。JSQCからは以下の3名であった(敬称略)。

加藤省吾(東京大学)

栗原一馬(早稲田大学)

奥田道明(東京理科大学)

来年は、10月16・17日(18日企業訪問)に韓国ソウル近郊で開催が予定されている。是非、今からご予定いただき、アジアのダイナミズムを実感していただきたい。

なお、本大会はANQ Wayにもとづき、質実剛健に運営されるために、他の国際大会と比較して参加費用が大変安く設定してある。これを可能にしたのが、経済的にご支援いただいた企業各社である。最後に、改めてお礼申し上げる次第である。



● 私 の 提 言 ●

『タグチメソッドとSQCの融合を！』

早稲田大学 理工学部 経営システム工学科 教授 永田 靖



SQC（統計的品質管理）では、操業データ・市場データ・実験データに基づき、現状把握・原因究明・要因

解析・予測などを行う。このとき誤差は自然発生的なものである。それに対して、バラツキの原因を誤差因子として扱い、それをわざとに大きくふってバラツキを意図的に作り出し、そのバラツキを小さくする制御因子とその水準を見いだす手法がタグチメソッドのパラメータ設計である。

パラメータ設計では、誤差因子による変動は自然発生的な誤差を凌駕するはずだから、確率分布を考えないと強

調されてきた。その方針がSQCとタグチメソッドの融合を阻んできた。

最近、タグチメソッドの手法としてMTシステムが広く用いられている。これは、マハラノビスの距離に基づいて異常パターンを発見するための手法である。多変量解析法の判別分析とは異なる視点をもつ。管理図の拡張とも言えるが、多くの変量間の相関を考えてものごとを見るという姿勢を広く浸透させた点はとても好ましい。

MTシステムは観察研究を行う手法であり、タグチメソッドの中では異色である。観察研究のときは、自然発生的な誤差を扱うので確率分布を考えることが合理的である。ここにSQCの考え方や理論が融合する。

自然発生的な誤差の中から何かを見

いだすことには、SQCの先人が努力して蓄積してきた手法とノウハウがある。それとMTシステムとを融合することより、観察研究の方法論がより発展することが期待される。

パブリケーション・バイアスという言葉がある。文献として登場するのはうまくいった事例ばかりであり、それらだけを鵜呑みにするとバイアスがかかってしまうという意味である。したがって、成功事例だけでなく、失敗事例を異なる視点から検討するのが有効である。例えば、誤差因子の取り方、調合の仕方、確認実験で利得が再現されなかったときの分析、さらには、SN比の選定の合理性をSQCの立場から考察することが大切だと考えている。このような観点から、本来はタグチメソッドとSQCは融合しながら用いるべきだったと思う。しかし、それをうまく果たすことができなかった。

いま、MTシステムの普及により、タグチメソッドとSQCの融合の絶好の環境ができあがったと思う。

第313回 事業所見学会 ルポ

JR東日本(株) 大宮総合車両センター

2006年6月26日JR東日本(株)大宮総合車両センターにて、第313回事業所見学会が開催された。テーマは「信頼性の高い快適な車両と輸送サービスを目指して！」で、25名の参加者であった。

大宮総合車両センターは、明治27年（1894年）日本鉄道株式会社の工場として設立され、昨年12月に110周年を迎えたという、歴史ある職場である。関東一円を走る宇都宮線や高崎線で使われている車両や成田エクスプレスなどの特急車両やカシオペアなどの客車、更に昔懐かしい蒸気機関車（現在は主にイベント用として活躍）などの各種車両のメンテナンス、改造を行っている。

まず、高木助役より大宮総合車両センターの概要について説明があり、車両の定期検査、メンテナンスなどの業務概要とそうした業務を通じての品質、安全、環境に関する取り組みについて解説がされた。

引き続きセンターの見学に移った。普段は乗客として

駅で見かけたり乗る車両を、レールのある地上から接するとその車輪の大きさ、車体の大きさ・迫力に圧倒される。また、モーターやパンタグラフなども細部にわたり分解、点検、再組み立てされている様子を直に見ることができ、徹底して手を加えている様子に接して安心感を覚えた。

今回の見学では、磐越線で使われていたD51がたまたま点検に入っていて、バラバラに分解中で、作業員の方が顔や手を真っ黒にしながら、大きなボルトでとめられたフランジに向かって汚れ落としをされていたのが印象的であった。

車両資料室では、昔懐かしい車両の銘板や部品・写真に接することができ、愛好家の方には興味つきない見学会となった。

見学終了後、質疑応答にはいり、定期点検、メンテナンスやISO9000の仕組み、安全への取り組みなどに関する質問が数多く出され、予定時間をややオーバーして成功裏に終わることができた。

羽田 源太郎

（コニカミノルタビジネスエキスパート(株)）

飯塚 悦功・元本学会会長 今年度デミング賞本賞を受賞

第33、34年度本学会会長の飯塚悦功氏が、今年度のデミング賞・本賞



を受賞されました。

同氏は、東京大学大学院教授として研究と教育に従事するかたわら、TC176国内対応委員会委員長、デ賞委員会実施賞小委員会副委員長、Asian Network for Quality副会長、医療の質・安全学会理事等の要職を歴任し、これらの活動を通じてISO 9000の発展、新たなTQMの概念構築、ならびにソフトウェア・医療等での質向上に向けた理論的研究とそのグローバルな普及に多大な貢献をされました。

本学会会長就任時には、「Q-

JAPAN

構想」のもと、概念の発信と教育・訓練機会の提供、研究会の充実、視野拡大の機会の創出、会員サービスの一層の向上に努められました。当学会としても同氏が栄えあるデミング賞・本賞を受賞されましたことは大変、光栄なことであります。

受賞おめでとうございます。



2006年9月の 入会者紹介

2006年9月20日の理事会において、下記の通り正会員27名、準会員15名、賛助会員1社の入会が承認されました。

(正会員27名) ○佐々木 浩行(東レ) ○永田 公一(埼玉日本電気) ○林 譲(国立医薬品食品衛生研究所) ○山田 一民(アジア航測) ○有浦 茂樹(テルモ) ○松本 興宜(河西工業) ○星野 政夫(コーセー) ○塚原 壱(塚原情報技術事務所) ○山路 学(青山学院大学) ○河尻 耕太郎(産業技術総合研究所) ○桑原 貢(吉田製作所) ○中島 満(ジャムコ) ○萩原 健男(萩原技術士事務所) ○織原 幸一(日本信号) ○今井 春男(キヤノン) ○朝倉 正俊(積水化学工業) ○藤原 信夫(豊田合成) ○三代川 実(富士物流) ○藤谷 大輔(ぺんてる) ○浜中 順一(日本科学技術連盟) ○足立 明隆・柏原 俊秀・大橋 一範(蘇西厚生会 松波総合病院) ○飯田 一郎(社会保険相模野病院) ○加藤 大輔(みずほ情報総研) ○馬場 雅子(看護師) ○山下 太郎(富士写真フイルム)

(準会員15名) ○空花 弘道・高 蕾・飯島 洋平・小澤 真史・齋野 弘隆・庄司 雄一(早稲田大学) ○榊原 茂人(名古屋工業大学) ○新井 亜貴斗(武蔵工業大学) ○中村 真理(武蔵工業大学) ○石垣 尚紀(静岡大学) ○Khandoker Asadul Islam(山梨大学) ○長嶋 顕広・土田 靖生・小林 高広・青山 達郎(電気通信

大学)

(賛助会員1社1口)

○コガネイ

正 会 員 : 3030名

準 会 員 : 111名

賛助会員 : 173社200口

公共会員 : 22口

デミング賞委員会(委員長 御手洗 富士夫)において、2006年度の日本品質管理賞、デミング賞各賞、日経品質管理文献賞の受賞者が決定し、授賞式は11月7日経団連会館にて執り行われました。

1. 日本品質管理賞
株式会社ジーシーデンタルプロダクツ
2. デミング賞本賞
飯塚 悦功 氏 東京大学大学院 教授
3. デミング賞実施賞
株式会社西澤電機計器製作所
Sanden International (Singapore) PTE Limited
Sanden International (U.S.A.), Inc.
4. 日経品質管理文献賞(文獻名五十音順)
 - (1)「医療の質用語事典」 飯田 修平、飯塚 悦功、棟近 雅彦 監修
 - (2)「QCサークルリーダーのためのレベル把握ガイドブック」 トヨタグループ TQM連絡会委員会 QCサークル分科会 編
 - (3)「身体知経営—企業は“現場100回”で進化する—」 羽田 祐一 著
 - (4)「ISO 22000のための食品衛生7S実践講座 食の安全を究める食品衛生7S」 第1巻 米虫 節夫 編著、第2巻 米虫 節夫 監修、角野 久史 編著、第3巻 米虫 節夫 監修、富島 邦雄 編著

行 事 案 内

●第112回シンポジウム (本部)

QMS有効活用及び審査研究部会報告

テーマ：ISO9001システム構築の質向上と第三者審査の質向上—審査員の目から見たQMS有効活用とは何か、組織に受け入れられる審査技術とは何か—

日 時：2006年11月25日(土)10:00~17:00

会 場：日本科学技術連盟千駄ヶ谷本部
1号館3階講堂

定 員：150名

参加費：会 員5,000円 (締切後5,500円)
非会員7,000円 (締切後7,500円)

準会員2,500円 一般学生3,500円

プログラム：

特別講演「標準化100年の歴史」

和泉 章氏 (経済産業省)

活動概要「QMS有効活用及び審査研究部会活動について」

活動報告 WG1~5

情報提供「ISO9001改訂の動向」

申込締切：2006年11月17日(金)

申込方法：ホームページからお申し込み
できます。

<http://www.jsqc.org/ja/oshirase/gyouji>

新規研究会メンバー募集

管理・間接職場における小集団改善活動研究会

経営環境が大きく変化する中、2002年に「進化した小集団活動 (e-QCC)」のビジョンが打ち出され、様々な実践例が報告され始めています。しかし、管理・間接職場において活動をどう推進すべきかについては多くの企業・組織が悩んでいます。本研究会では、実際の推進事例を深く分析することで、管理間接職場における小集団改善活動の目指すべき姿を明らかにし、広く活用できる運営・推進のためのガイドラインを作成します。

主 査：中條 武志 (中央大学 理工学部 教授)

開催日：11月~12月に第1回開催予定

場 所：日科技連 東高円寺ビル

申込方法：本部事務局宛に会員番号・氏名・所属・連絡先を明記の上、FAXまたは
E-Mail (office@jsqc.org) にてお申し込みください。

定 員：20名

各賞表彰

第36回通常総会において、第35年度研究奨励賞1件、品質技術賞2件、ならびに品質管理推進功労賞4氏の授賞および表彰が行われた。

研究奨励賞

『比例式モデルに基づく新しいSN比の提案とその応用』

河 村 敏 彦 氏 (広島大学原爆放射線医科学研究所 現：統計数理研究所)

「品質」Vol.36, No.3, pp. 91-99 (2006)

品質技術賞

『新商品開発のためのスコアカードとその活用法の提案』

入 倉 則 夫 氏 (株)デンソー

「品質」Vol.35, No.4, pp. 73-84 (2005)

『リコーにおけるマネジメント技術革新』

永 原 賢 造 氏 (株)リコー

川 崎 信 氏 (株)リコー

「品質」Vol.36, No.3, pp.57-66 (2006)

2006年度 品質管理推進功労賞

及 川 忠 雄 氏 QKマネジメント研究所

田 部 信 雄 氏 TQRテクノシステム

松 本 隆 氏 (財)日本規格協会

村 松 次 郎 氏 (株)ジェイテクト

第36年度役員体制決まる

去る10月28日に開催された第36回通常総会において新役員が選出承認され、第36年度の役員体制は以下のとおり決まった。

	◇	◇	◇
会 長	圓川 隆夫	東京工業大学	教授
副会長	渡邊 浩之	トヨタ自動車(株)	技監
“	鈴木 和幸	電気通信大学	教授
理 事	荒木 孝治	関西大学	教授
“	安藤 之裕	技術士	
“	飯塚 敏之	(財)日本規格協会	課長
“	岩田 修二	サントリー(株)	テクニカルアドバイザー
“	大野 正直	日本ガイシ(株)	参与
“	大藤 正	玉川大学	教授
“	長田 洋	東京工業大学	教授
“	小大塚一郎	(財)日本科学技術連盟	事業部長
“	鈴木 秀男	筑波大学	助教授
“	椿 美智子	電気通信大学	助教授
“	永田 靖	早稲田大学	教授
“	永原 賢造	(株)リコー	顧問・技師長
“	根岸 達夫	キヤノン(株)	品質統括センター 副所長
“	細谷 克也	南品質管理総合研究所	代表取締役社長
“	松田 真一	南山大学	助教授
“	光藤 義郎	JUKI(株)	中央技術研究所 部長
“	山本 渉	電気通信大学	講師
学会理事	釜谷 佳男	富士ゼロックス(株)	品質管理部
“	瀧沢 幸男	日野自動車(株)	グループ長
監 事	神田 範明	成城大学	教授
“	山崎 正彦	元・コニカ(株)	
顧 問	飯塚 悦功	東京大学	教授
“	桜井 正光	(株)リコー	代表取締役社長執行役員

第36年度役員役割分担表

論文誌編集	◎永田 ○兼子
学会誌編集	◎光藤 ○山田
広 報	◎根岸 ○瀧沢
事 業	◎大藤
研 究 開 発	◎椿(美)
規 定	◎飯塚(敏)
会員サービス	◎岩田 ○釜谷
選 挙 管 理	◎圓川
庶 務	◎鈴木(秀)
最優秀論文賞/研究奨励賞	◎鈴木(和) ○永田
品質技術賞	◎渡邊 ○光藤
品質管理推進功労賞	◎圓川 ○鈴木(和)
国 際	◎安藤 ○兼子
標 準	◎永原 ○山田
総 合 企 画	◎圓川
W e b 特 別	◎山本
研究助成特別	◎松田
ANQ支援特別	◎安藤 ○飯塚(悦)
QC相談室特別	◎荒木
中 部 支 部	◎渡邊 大野 松田
関 西 支 部	◎細谷 荒木
ソフトウェア部会	◎兼子 ○笹部 ○保田
QMS有効性および審査研究部会	◎福丸 ○平林
医療の質・安全部会	◎棟近 ○水流 ○永井(庸)

◎委員長、支部長、部会長 ○副委員長、副部会長